

# 熊本県における中高連携を通して見た高大連携

## —高校側が垣根を低くして— (I)

鋤 崎 勝 也

### はじめに

現在、各地では幼小連携、小中連携、中高連携、高大連携と他校種間での連携の運動が広がり、インターネットで「中高連携」を抽出すれば13,400件が画面に出てくる。その大部分は、中央教育審議会（以下中教審）第2次答申〔平成9（1997）年6月〕で答申された内容に沿った中高一貫学校での実践や方法などである。又、一方「高大連携」を検索すれば8,120件が羅列される。その内容の大部分は、大学での単位認定、出前講義など大学からの一方的な押しつけの連携で、従来の域から出ていない。

現在行われている学校種間の連携は、平成11年（1999）12月の中教審答申「初等中等教育との接続の改善について」を契機に盛んになってきた感がする。答申では、各学校の段階の教育目標を明確にすると共に、今後の課題として「幼児期から初等中等教育を一環してとらえて各学校段階の連携を一層強化するために（中略）カリキュラムの一貫性、系統性をより一層確立すると共に、学校段階間のより望ましい連携や接続の在り方について総合的かつ多角的な観点から検討する」と、その必要性が示されている。

勝野頼彦は、『中教審が指摘するように、カリキュラムの整合性や、児童生徒の心身の発達、高校や大学への進学率の上昇、入試だけでない多様な接続の在り方等を考慮した場合、基本的に学校間の連携を進めることは必要である。ただし、その際に留意すべきは、学校種あるいは学校種間の固有の課題や特殊性をよく見据えて連携を進めることである。』と述べている<sup>1</sup>。

このようなある程度ルールに乗った官制の中高連携の論文や討論は多くあるが、そうではなく学校現場の視点から論じてみたい。特に、平成8、9年度（1997、1998）に熊本県水俣市の高校現場でじっくり腰を下ろし、あらゆる方法を駆使しながら実践した中高連携をもとに（熊本県の高校現場で一定の成果があった実績を踏まえて、中学校・地域に高等学校から何を発信し、どう働きかけるか、又その成果はどうだったかの事例を提供する中で、大学との連携が見える）、「高大連携とは何か」を模索し、又、全体像がはっきりしない「高大連携」または「高大接続」の現状を高校側から捉えて、これからの「高大連携」の在り方について提言してみたい。

## 第1章 中高連携 —高校側が垣根を低くしなければ・・・—

### I. 中高連携の現状と背景

中高連携について考察するためには、まず、その実態を正確に把握する必要がある。現在、中

高連携と言ったら、「中高一貫教育」といわれるほどに文部科学省、都道府県教育委員会、教育研究者等全てが「中高一貫教育」一色である。しかし、「中高一貫教育校」の数は全国でも173校<sup>2</sup>、熊本県では2校<sup>3</sup>であり、まだまだ全国の数から言えば微々たるものであり（全国の中学校数11,035校、高校数5,418校）<sup>4</sup>、普通の高校・中学校においては全然参考にはならない。そこで一般の「中高連携」、すなわち既存の高校と普通の市町村立中学校との連携について地域を抱き込んだ教育実践を基にをあらゆる角度から考察してみたい。

### 1. 「中高一貫教育」導入の趣旨<sup>5</sup>

「中高一貫教育」導入の趣旨は、従来の中学校・高等学校の制度に加えて、生徒や保護者が6年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会をも選択できるようにすることにより、中等教育の一層の多様化を推進し、生徒一人一人の個性をより重視した教育の実現を目指すものとして、中教審第二次答申（平成9年（1997）6月）の提言を受けて導入した。

### 2. 中高一貫教育の実施形態<sup>6</sup>

中高一貫教育については、生徒や保護者のニーズ等に応じて、設置者が適切に対応できるよう、次の3つの実施形態がある。

- (1) 中等教育学校・・・・一つの学校において一体的に中高一貫教育を行うもの
- (2) 併設型の中学校・高等学校・・・・高等学校入学者選抜を行わずに、同一の設置者による中学校と高等学校を接続するもの
- (3) 連携型の中学校・高等学校・・・・既存の市町村立中学校と都道府県立高等学校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等深める形で中高一貫教育を実施する。

### 3. 今後の整備目標<sup>7</sup>

平成11年（1999）1月に閣議決定された「生活空間倍増戦略プラン」及び平成13年（2001）1月に策定された文部科学省の「21世紀教育新生プラン」において、「当面、高等学校の通学範囲（全国で500程度）に少なくとも1校整備されること」との整備目標が示されている。この目標は生徒や保護者にとって、実質的に中高一貫教育を選択することを可能とするため、当面必要な数を示したものであり、その早急な実現が求められている。

### 4. 各都道府県等における中高一貫教育校の設置状況について（平成17年5月）<sup>8</sup>

設置状況・・・平成17年度の設置校数は、平成16年度の153校から20校増加し、173校となっている。また、公立の中高一貫教育校が設置されている県は42都道府県となり、そのうちの32都道府県は、複数校が設置されている。

表1 中高一貫校設置状況の内訳

区分	中等教育学校	併設型	連携型	計
公立	8 ( 7 )	38 ( 35 )	74 ( 65 )	120 ( 107 )
私立	9 ( 9 )	40 ( 33 )	1 ( 1 )	50 ( 43 )
国立	2 ( 2 )	1 ( 1 )	0 ( 0 )	3 ( 3 )
計	19 ( 18 )	79 ( 69 )	75 ( 66 )	173 ( 153 )

(注1 括弧内は平成16年度までの設置校数である)

## 5. 熊本県の「中高連携」の実際<sup>9</sup>

- (1) 熊本県阿蘇郡小国地域においては、熊本県立小国高校、小国町立小国中学校・南小国中学校の3校が平成14年（2002）4月から「中高一貫教育校」として歩みを始めた。
- (2) 熊本県天草郡天草西地域では熊本県立天草高校天草西校、天草町立天草中学校との2校で平成14年（2002）4月から実施された。
- (3) 教育内容と成果
  - ① 交流授業…数学、英語における定期的な交流授業の実践
  - ② 6年間を見通した授業内容の研究
  - ③ 学校行事での交流

## II. 高校現場からみたからみた中高連携

### 一熊本県立水俣工業高校 平成8・9年（1996・1997）での実践一

水俣工業高校と、水俣市内中学校（7校）および芦北郡内中学校（5校）の連携について、高校側の校長として取り組んだ実績をもとにその実際を論じてみたい。

### 1. 水俣・芦北地区の現況

水俣は「水俣病」を抜きには語れない。水俣病の公式発見は昭和31年（1956）で、紆余曲折をへて40年間かかって平成8年（1996）に和解した。その特徴は領主的存在の企業・従業員（加害者）と貧困な市民の（被害者）の関係が基底にあった。

【第3回水俣病慰霊式の吉井正澄水俣市長式辞】より {平成8年（1996）5月}<sup>10</sup>

「小さなまちの中に加害者と被害者が同居したことで公害の悲劇が増幅された。市民は患者や家族の悲惨な状況に心から同情し、道義的な怒りを感じる一方で、「チッソ」が潰れると自分は職を失うのではないか、自分の店は潰れるのではないか等と思い惑い自らに降りかかる地域の経済的、社会的破綻を極度に恐れていた。相反する問題を同時に抱え込んだ市民には、いずれに荷担するかで、複雑な感情や葛藤が生まれ、患者と市民の心が離反し、患者も幾つかの団体に分かれ水俣は混乱の極みに達して現在に至っている。」又、一方では企業が第一組合と第2組合とに分かれた「チッソの安定賃金闘争 昭和37～40年（1962～1964）」があり、そのための相乗効果で地域住民は感情的にもつれ、分裂し現在に至っている。

吉井正澄水俣市長の著書『離礁』より {平成9年（1997）発行}<sup>11</sup>

「安定賃金闘争が収拾された後も、会社と第一組合との対立、第一組合員と第二組合員との従業員同士の反目、双方の支持に分かれた地域の住民の感情も長期間にわたり融和することはなかった。市議会でも議会人事や重要法案などについては感情的な対立が繰り返され、そして今なお、水俣の内面社会の底部に活断層として横たわっており、事あるごとにいろいろな騒動に共鳴し振動を増幅してき、花見や祭り等も衝突しがちとなり連帯感がなくなり、現在まで続いているところがある。」

このような中で市政は停滞し、市民は疲弊しており、教育、文化、スポーツ面まで手が回らなかった。このため中学校の成績は低下し、熊本県中体連では1、2回戦負け、非行では県内中学校のワースト10に2校も名前が挙がっていた。また一方、芦北・水俣地区の高校3校は {中学生3年生820名のうち140名（力のある生徒）が県外その他の地区に流出し}<sup>12</sup>恒常的に定員割れが続いていた。特に、定員割れから1科（1学級）廃科になった水俣工業高校は市民から全く期待

にされない高校になっていた。

## 2. 当時の水俣工業高校の現況

水俣工業高校は10年近く定員割れが続く中、平成5年(1993)度に工業化学科が廃科(1クラス)になり平成8年度(1996)より現在の3科(機械、電気、建築)4クラスの形態になったが、改善の兆しは見られず、更に定員割れがひどくなり、低学力で無気力な生徒が多数入学してきていた。又、全員入学のために無試験の状況で、競争原理が働かず無気力・無感動・無関心の生徒が多くなっていった。中学校での進路指導にも多大な影響が出て芦北・水俣地区の社会問題になっていたし、本校の職員、生徒、保護者、OBも元気がなくあきらめムードが見られた。

地域においては生徒や親、まして中学校では水俣工業高校には何も期待出来ないとの思いが広がっていた。

## 3. 中学校・地域との連携の在り方

水俣工業高校における活性化が生徒、保護者、OB、地元中学校ひいては疲弊した地域全体に勢いを取り戻し、その事が生徒増に繋がり、更なる活性化を呼び込むことを確信し、歴史の歯車を正転させる事を職員と共に誓い「当てにされなくなった水俣工業高校よさようなら!!」を合い言葉に“教師の意識高揚と学校の活性化”“中高校連携及び地域連携による地域との信頼関係”に特に力を入れて、次の事を実践した。

### (1) 校内目標の充実 —校内研修などを通して意思統一—

平成9年(1997)4月に水俣工業高校長として就任するに当たり、次の事をお願いした。

- ① もの作りは、人作り、国作り・・・技術立国で生きていくには工業教育が必要である
- ② 世間の人々が工業教育の良さを知らない・・・額に汗する実践技術者の育成
- ③ 本校の教師として工業教育を担う・・・全てに襟を正し、真摯な気持ちで頑張る
- ④ 定員割れを無くすには「実行」と「行動」以外にはない
- ⑤ 夢を見ることが大事・・・諦めないこと
- ⑥ 地域の学校として信頼されること

### (2) 校内充実のため取り組んだ実践 —今年度新たに取り組んだ主なもの—

- ① 入り口での実践(地域や中学校の生徒、保護者に対して、本校の持っている工業教育の理解とPR)
  - a 地域のイベント全てに参加する・・・水俣市のイベントには120%参加する  
“恋龍祭、水俣市文化祭、こころフェステバル、駅伝、水俣市総合物産展、社会福祉各種ボランティア、国体用広告塔・ポスター、弁論大会等々”
  - b 中学校に対するPR  
“アイデアロボット大会、体験学習、中学3年担任との懇談、本校での製作品贈呈、ポスター等製作配布、生徒作品の母校(中学校)への寄贈”
  - c 開放講座 “パソコン講座、一般32名参加”
  - d 市長との懇談、その他水俣市・芦北郡の各種団体・委員会などのイベントに積極的に参加する
- ② 中味の実践(生徒、職員、保護者のやる気の喚起、対外行事・スポーツ等への積極的

参加及び挑戦、工業高校の持っている技術力の認識と自信)

- a 朝の読書会…朝の10分間 (12月より実施)
  - b 芦北養護学校との連携交流…フラワータワーの製作など
  - c 工業高校ならではの実習授業公開 (中学校・一般) と平行して校長と保護者の個人懇談 (11月に1週間)
  - d 行事の見直し…クラスマッチ、体育大会、文化祭、定期考査等
  - e 積極的な職員研修と復講の義務づけ  
“全国生徒研究発表会、全国産業教育フェア、九州各県先進校研修7校、県内先進校研修5校、先端企業研修2社、各種研修会”
  - f 県下工業高校学習合宿 (工進研)<sup>13</sup>に初参加…生徒6名 職員1名～3泊4日
  - g 中途退学対策研究指定校<sup>14</sup>としての研究、研修
  - h 学習習熟度別指導研究指定校<sup>15</sup>としての研究、研修
  - i 事務関係書類、特に起案書や出張願等の統一と徹底の意識改革
- ③ 出口の実践 (進学・就職の充実、保護者・同窓会等との連携)
- a 進路志望の早期決定…1年次に生徒、保護者も同時に決定する～校長面接
  - b 早朝課外の実施…全学年、週4日、英・数～11月より実施
  - c 熊本県立大合格…開校以来初めての国・公立大学合格
  - d 放課後課外の実施…資格取得～各科・各学年で実施
  - e 学校・保護者会・同窓会の一体化…11月、1月に懇談会
  - f 先輩 (同窓会副会長)、企業関係者による講演会
- (3) 地域との連携 (水俣市・津奈木町を中心にして)
- 地域や中学校の生徒、保護者に対して、本校の持っている工業教育の理解とPR—
- ① 水俣地区における本校のあり方
- a 将来構想委員会設置…水俣市と一体となった本校のあり方の検討
  - b 福祉、環境、ボランティア校としての活動と定着
  - c 水俣の賢人 (徳富蘇峰、蘆花など) の学習会 (9月より) と生徒への定着
  - d 部活動の充実…工業高校の大きな柱～全国規模での活動  
カヌー部の復活と充実 (国体カヌーの拠点校) ～カヌー協会と共に14年ぶりに全国大会に出場 {H. 9. (1997)}
  - e 水俣市長<sup>16</sup>が本校の開校以来、初めて卒業式に参列
  - f 開放講座…パソコン講座、一般32名参加
  - g 水俣市長との定期的な懇談、その他水俣市の各種団体・委員会などに積極的に参加する
- ② 地域のイベント全てに参加する
- a 恋龍祭 (7月)    b 水俣市文化祭 (11月)    c ころろフェスティバル (12月)
  - d 駅伝 (1月)    e 水俣市総合物産展 (11月)    f 各種ボランティア
  - g 国体用広告塔・ポスター (国体、社会福祉協議会、恋龍祭等)
  - h 弁論大会    i 生徒作品の寄贈
- (4) 水俣市 (5校)・芦北郡 (7校) 中学校との連携
- ① 中学校での研修、公開授業、体育会、文化祭等積極的に (押しかけても) 参加

- ② 公開授業の実施…保護者、中学校の先生、生徒（自由に参加）
- ③ 体験学習…課題研究、実習など（申し入れがあったら無条件に公開）
- ④ 中学校との交換授業…工業、理科、数学
- ⑤ 本校相談窓口開設…中学校の先生、親、生徒、その他自由に10月から実施
- ⑥ 中学校に対するPR  
 “アイデアロボット大会<sup>17</sup>、体験学習、中学3年担任との懇談、本校での製作品贈呈、ポスター等（水俣市、東陽村等の生徒作品製作配布）”
- ⑦ 中学校での説明会（7月及び11月）
- ⑧ 本校での説明会（12月）
- ⑨ 中学生の体験入学（7月）
- ⑩ 中途退学研究指定校としての懇談会（9月及び12月）
- ⑪ 中学3年担任への説明会（10月）

(5) 熊本県立芦北養護学校<sup>18</sup>との連携

「ものづくり」を中心に据えた教育を通しての工業教育では、人格教育や情緒面での向上が難しくやや無機質で粗野な感じの校風になってくる感があり、各高校ともその教育に腐心している。

一方、養護学校の教育はその設立の趣旨からして人の痛みや思いやりが体感できる教育が根底にあり、人格形成そのものの教育が実践されているが、その実態を理解してもらうための交流が難しく、高校生との交流、協力等がなかった。特に工業高校の持っている技術力（児童・生徒の個々人の状況や要望にあった鉄鋼品の溶接、木工製品の製作、電気やインテリア等の技術）を利用出来れば、更に特殊教育が充実し進展できるのだがとの思いがあった。

このような思いを、工業高校と特殊教育諸学校との交流を通して、お互いの教育内容を公開、研修、補完し合い、少しでもその一端が実践・体感出来たら素晴らしいとの信念で、水俣工業高校から「ものづくり」を中心に据えての協力を申し出、その中で人の痛みが分かる教育を学習させてもら事を芦北養護学校の校長と協議して実現できるようになった。

① 中味の実践

生徒、職員、保護者のやる気の喚起、芦北養護学校との対外行事・スポーツ等への積極的参加及び挑戦、工業高校の持っている技術力の認識と確信。

② 芦北養護学校との連携交流…製品使用方法や贈呈式などの交流

“フラワータワー、頭で押すスイッチ、児童・生徒の体型に合わせた机・椅子、ディグソーパズル、傾けむけるベッド、ゴーカートの列車、モグラ打ち、輪投げ、声でのスイッチ、リヤカー等々の制作”

③ 「芦北養護学校の交流と“ものづくり”」を基にして、熊本県工業高校の生徒研究発表大会<sup>19</sup>で発表し金賞を受賞する。また、新聞などで大々的に取り上げられる。

④ 「課題研究」などでの福祉機器の製作を制作し芦北養護学校等に寄贈する。

⑤ 高校の問題生徒をボランティアとして芦北養護学校派遣し、児童・生徒との交流をする中で生徒達に心の変化が見られ、高校の生徒指導部での指導以上の効果があった。

#### 4. 水俣工業高校の活性化とその成果

入学志願者は昨年より1割程度(123名→135名)増加したが定員割れの状況は変わらず残念であった。地域に浸透している『期待されていない工業高校』を変えるには、一朝一夕にはいれない。地道な指導、特に進学・就職などの出口での実績を示す以外に道はないと痛感した。幸いにも、開校以来初の国公立(熊本県立大学)合格をはじめ熊本県立技術短期大学校2名合格、就職100%達成など学校は確実に動き出しているし、ハード面(管理職、主任・主事クラスでの企画・立案、やる気などのルール作り)ではほぼ確立できたと思う。ソフト面(職員が自ら自信を持ちやる気を出して、行動・実践する体制)での確立を確実なものにしなければならない。

幸い、これまでの中高連携が水俣市・芦北郡町などの地域の方々、又、各中学校・芦北養護学校等からの評価は非常に高く、水俣市、商工会議所などからの協力や要望が相次ぎ生徒・教師・保護者は水俣工業高校が認知されたと喜んでいる。

高校からの要望も地域では、ほとんど受け入れてもらった。(水俣市の重要文化財である徳富蘇峰の書の永久借用、市主催のオーストラリアへの留学、ボランティア用具の予算、市広報誌への掲載、市長の入学式・卒業式参加、小・中学校とのスポーツ交流と懇親会、全国・九州大会に出場する生徒への援助等々)

水俣地域の全ての行事に精一杯関わり・溶け込むことで本校を活性化することでできたし、更に、水俣の「もやい直し」<sup>20</sup>の一翼(教育面での)を担い、各種イベントに地元小、中、高校と協力して共に参加していく必要がある。

#### 5. 今後の水俣工業高校の活動

- (1) 県教委へのPR ① 学校訪問 ② 予算獲得 ③ 各種研修参加依頼
- (2) 先生方の熱意(本校を心から愛して欲しい) ① 実績 ② 目的を持つての活動
- (3) 育成会、同窓会とのタイアップ
- (4) 地元の方々の信頼を勝ち得る以外に本校の生きる道はないとの確認
- (5) 水俣市のイベントには120%参加していく
- (6) 本校のあり方～地域と共にあり、地元の方々に愛される高校  
熊本県の【福祉の水工高、環境の水工高、ボランティアの水工高】としての地位
- (7) 中退研、習熟度別研究も地域から愛される高校として解決したい

#### 6. 現在の水俣工業高校

—水俣工高生、ものづくりで地域貢献— の見出しで熊日報道<sup>21</sup>

県立水俣工業高校が、授業で学ぶ『ものづくり』の知識や技術を生かした専門高校ならではの「地域貢献」を進めている。商店街の休憩スペースに置くベンチや、福祉施設で利用する介護支援テーブル、旅館で宿泊客を迎える照明器具などの制作を授業の一貫として請け負う活動で、地域に開かれた学校作りにも一役買っている。

数年前から福祉施設や幼稚園に授業で制作した木製遊具など贈っていたが「ニーズを受けて作ること(課題研究…総合的な学習の時間)で地域にも喜ばれ、生徒自身も授業に意欲的に取り組むようになった。」と、その教育効果が上がったことを実感しているという。

又、一方では生徒数の減少による学校存続への危機感が背景にあった。同校の入学人数は少子化に伴い、昭和50～60年代(1975～1985)の200人前後から、100人を切るまでの減少した。教頭

も「工業高校独自の教育の在り方を考え、地域に根差した特色ある学校づくりを目指す必要性があった」と指摘する。

材料費は依頼先が手出しする形。木工製品の建築科、福祉施設のベッドに備えるプザー制作の電気科、車いす利用者の向けに段差を解消するリフト制作など全校で活動している。校長は「地域に必要とされる学校に向け存在感を高めていきたい。この活動が起業家教育にも繋がれば」と期待を寄せている。

### Ⅲ. 二度目の地域・中高連携—大津町を中心に翔陽高校・平成12～14年（2000～2002）

「その時、生徒・先生・保護者・OBは頑張った」<sup>22</sup>より

平成11年（1999）4月1日、翔陽高校校長の辞令を受け取り学校に向かう車の中で私は、母に連れられて大津町に来て白川で遊んだ幼い頃のことが脳裏を駆けめぐりました。私の母は、大津町の出身であり今も親類が多数いる中で、教職の最後の仕上げを母の故郷で過ごすことに浅からぬ因縁を感じ、今まで培ってきた人生の生き様をかける決意をした。

翔陽高校は熊本県唯一の総合学科高校として4年目を迎え、教育改革の最先端を開拓するパイオニア精神で職員が頑張っており、総合学科のことはどこに聞いても明確な回答が返ってこない日々の中で苦勞され、それこそ「走りながらの総合学科教育の研究、指導、実践」であったと思います。生徒諸君も、翔陽高校の大きな未来と夢を求め、新たな歴史を自分たちが作るという意気込みのもと、生徒会も平成11年（1999）First Step（歴史を創る第一歩）平成12年（2000）Step Forward（前に踏みだそう）、平成13年（2001）Gradual Step（私の進化）を掲げ、職員と共に総合学科高校の基礎創りに精一杯の協力と努力を惜しみませんでした。

私も、翔陽高校の将来の大きな飛躍と夢の実現のために、いくつものアドバルーンを揚げ、生徒・先生・保護者・OB・地域の方に理解と協力を求め実行していきました。その中のいくつかを紹介し頑張った先生の名を記念誌の中に残しておきます。

#### 1. ピアス・ルーズソックス・茶髪の根絶

平成11年（1999）9月から平成12年3月までの根絶月間で生徒指導主任を中心とした生徒指導部が努力し、ほぼ根絶した。

#### 2. 玄関前の書道の掲額

平成11年（1999）10月 総合学科高校出発を記念して、その年の最高の作品を、書道同好会顧問の先生の指導で一点選考して、玄関前に掲示する事にした。

#### 3. インターンシップの実施

平成12年（2000）1月 2年学年主任を中心に大津町役場、農協、商工会、各企業等をお願いに回り企画し121社・団体が協力してくれた。県下では最初の2学年全員（320名）が参加し大津町を中心に1週間実施した。翔陽高校生のイメージを一新し、県下の高校などに多大な影響を与えた。

#### 4. フェンシング部の立ち上げ

平成12年（2000）4月 オリンピック候補の監督と部長のもと、部員集め、練習場所、練習道具等何もない“0”からの出発であった。2年生主将のもと、男子4名（1年）女子4名（1年）で出発し、平成14年（2002）3月には九州代表で全国大会に出場し、最高位は全国でベスト8位に入賞する。



## 5. 大学体験学習

平成13年(2001)7月 2年学年主任が中心になり県内の崇城大学・尚絅大学・九州東海大学・九州ルーテル学院大学に直接相談し了解を得て企画する。

全国初の試みで、2年生(42名+3年生6名)を1週間、大学生と同じ条件で講義をそのまま受講させる。大学との本格的な交流がはじまり、生徒・保護者・高校・大学とも評価が高く、更なる発展を模索している。

## 6. 図書館(本の寄贈)フェア

平成12年(2000)4月 生徒一人当たりの蔵書数が熊本県ワースト3の実情を生徒先生・保護者・OBに訴えて、図書館の先生を中心にして「熊本県の全高校の中で一番本を集めよう」とのキャンペーンを繰り広げ、約3900冊を集めその年の高校ナンバー1になった。

- ① 保護者会から100万円
- ② 翔陽祭でのバザー益金 12万円
- ③ 南阿蘇地区 3.3万円
- ④ 育友会 平成6年度卒業生 7万円
- ⑤ 生徒・職員・保護者・OBからの寄贈本 1104冊

## 7. 総合学科高校九州地区大会

平成12年(2000)11月 九州地区19校の総合学科高校の校長、担当者が一堂に集まり種々の問題や悩みを討議する会議を本校の当番として教務主任が企画運営全てを取り仕切り成功させ九州地区会長校として役目を果たす。

## 8. 朝の10分間読書

平成12年(2000)12月 朝の読書を図書館長を中心に研究し、他校の実情を視察した上で、初年度3ヶ月間の試行を実施し、来年度からの本格実施に備える。

## 9. 熊本県高等学校総合学科実践発表会

平成13年(2001)11月 総合学科の5年間の集大成として大津町の文化ホールで教務主任を中心として県内外から320名を集めて発表会を実施した。

## 10. 地元中学校との交換授業

平成14年(2002)1月 進路指導主事を中心に大津中学へ数学を、大津中学より社会科を、大津北中学とは理科を実施して、お互いの緊張感の中で真の交流が実施できた。

11. その他多くの先生達が翔陽高校に歴史を残されましたが紙面の都合で次に項目だけを記しておきます。

- ① 学校購入品すべての入札実施(事務長)
- ② 1年生の学習宿泊研修(1年学年主任)
- ③ 百周年記念事業の設立委員会の立ち上げ(同窓会担当)
- ④ 大津町幼・小・中・高校の職員ビーチバレー懇親会参加
- ⑤ 大津町「教育の日参加」
- ⑥ 吹奏楽部の再立ち上げ(育友会から11万円寄贈、学校から100万円)
- ⑦ 育友会の出席率の増加 38%→73%
- ⑧ 進路指導室の移動(進路指導主事)
- ⑨ 就職・進学の日誌化(進路係り)
- ⑩ 校内インフラネット、インターネット接続、情報管理のコンピュータのバージョンアップ、パソコンの更新(47+10)(情報管理部長)
- ⑪ 学校案内パンフレットの作成(新任の先生)

- ⑫ 国公立大学への合格（3年主任）
- ⑬ 生徒会の国体、高校総体へ積極的参加（生徒会係り）

#### IV. 今後の中高連携の在り方ー高校側が垣根を低くするー

校内の組織を充実し（機能的な組織化、入口・出口・資格取得のデータベース化等）、学習・スポーツに活力を与え魅力ある高校をアピールし、中学生に安心と希望を与えるように力を蓄える。入り口・出口の充実を図ると共に、中学校や地域に高校が見えるように（作品発表やイベント・ボランティアへの積極的な参加等）常に発信し続ける。地域や中学校に対しては、積極的（呼びかけるだけでなく、自信を持って押しかけていく）に働きかける。

1. 高校の持っている知的財産（人材、技術力、情報、同窓会、地域との繋がり）を高校側から積極的に働きかけ、中学校・地域と共に作り上げていく。
2. 中学校・地域のために、各種のイベントに積極的に参加し、指導助言、協力をする。
3. 高校の働きかけによる、中学校の教科指導、部活指導を行う。
4. 地域の行政、福祉事務所、婦人会、老人会、商工会議所などの諸団体の交流を活性化しイベント・ボランティアに積極的に参加し指導および協力をする
5. 各高校との連携を密にし、常に情報交換をする
6. 郡・市教育委員会、各中学校・中学校長会との連携を密にする（高校が主催する）

“追” 第1回は、「中高連携」の実際と今後の実践について述べましたが、次回では「高大連携」を高校側から見た在り方について提言します。

### 注

- 1 勝野頼彦『高大連携とは何』学事出版株式会社 2004年 184頁
- 2 文部科学省ホームページ <http://www.mexc.go.jp/> 1. 生涯学習・学校教育
- 3 教育【くまもと】NO22 2002年9月 熊本県教育庁総務企画課
- 4 『内外教育』2005年9月16日号 時事通信社 2005年9月
- 5 文部科学省ホームページ <http://www.mexc.go.jp/> 1. 生涯学習・学校教育
- 6 同上
- 7 同上
- 8 同上
- 9 教育【くまもと】NO22 2002年9月 熊本県教育庁総務企画課
- 10 吉井正澄『離礁』有限会社水俣旭出版社 1997年 49頁
- 11 同上 24頁
- 12 芦・水地区中高校校長連絡会 資料『芦北教育事務所 平成9年度 中学校実態調査』
- 13 熊本県立工業高等学校長進学指導研究会主催
- 14 熊本県教育委員会指定研究校
- 15 同上
- 16 吉井正澄水俣市長
- 17 熊本県立工業高校長主催

- 18 熊本県立芦北養護学校（熊本県葦北郡芦北町にある創立18年目の小・中・高の重複を持つ養護学校で現在は、13学級・生徒数38名である）
- 19 熊本県立工業高校長主催
- 20 吉井正澄『離礁』有限会社水俣旭出版社 1997年 146頁
- 21 平成17年（2005）11月3日付け 熊本日々新聞朝刊
- 22 『翔陽高校100周年記念』平成17年（2005）7月30日 鋤崎 勝也